



集詩

人龍

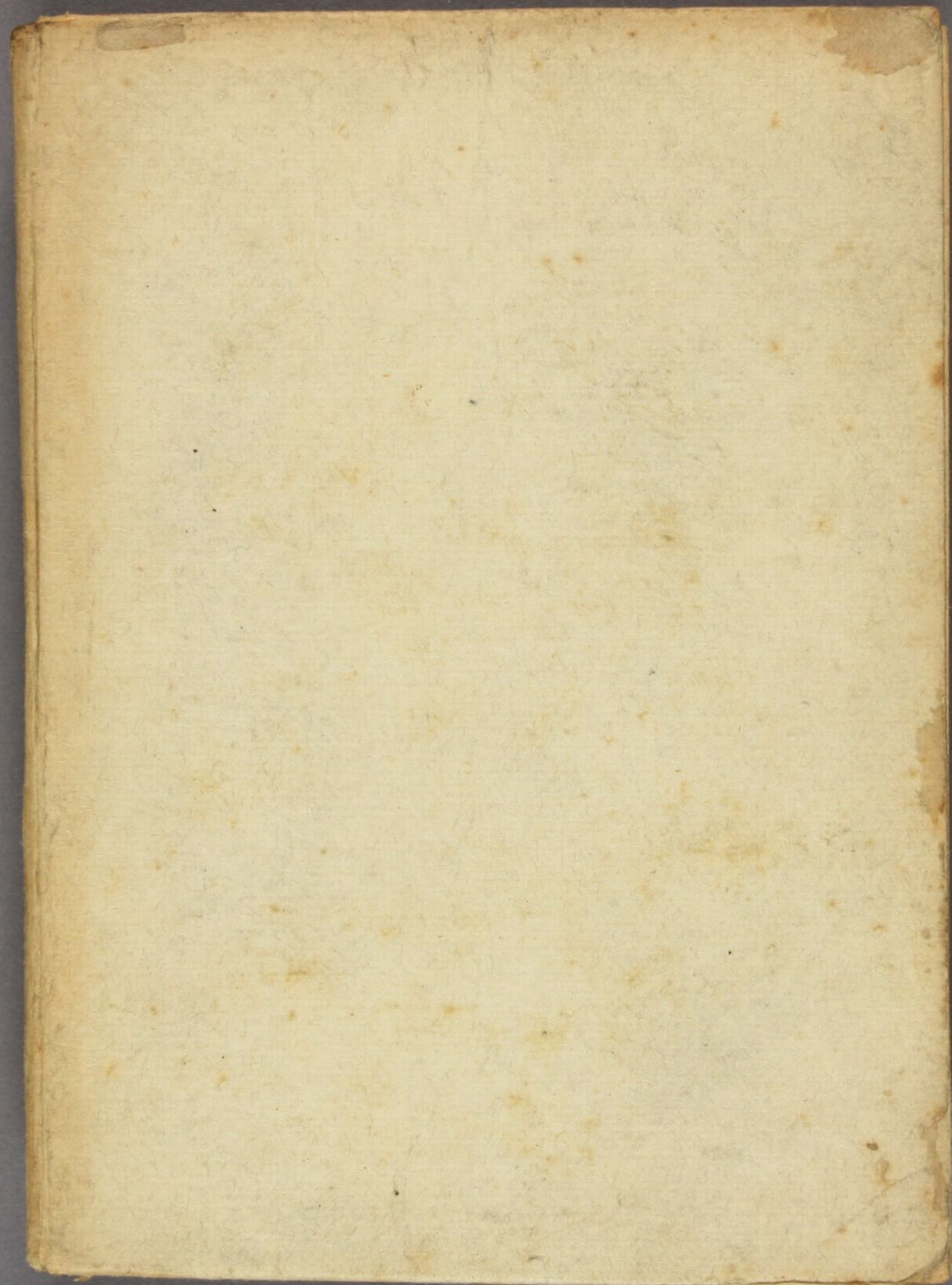
水苔本有

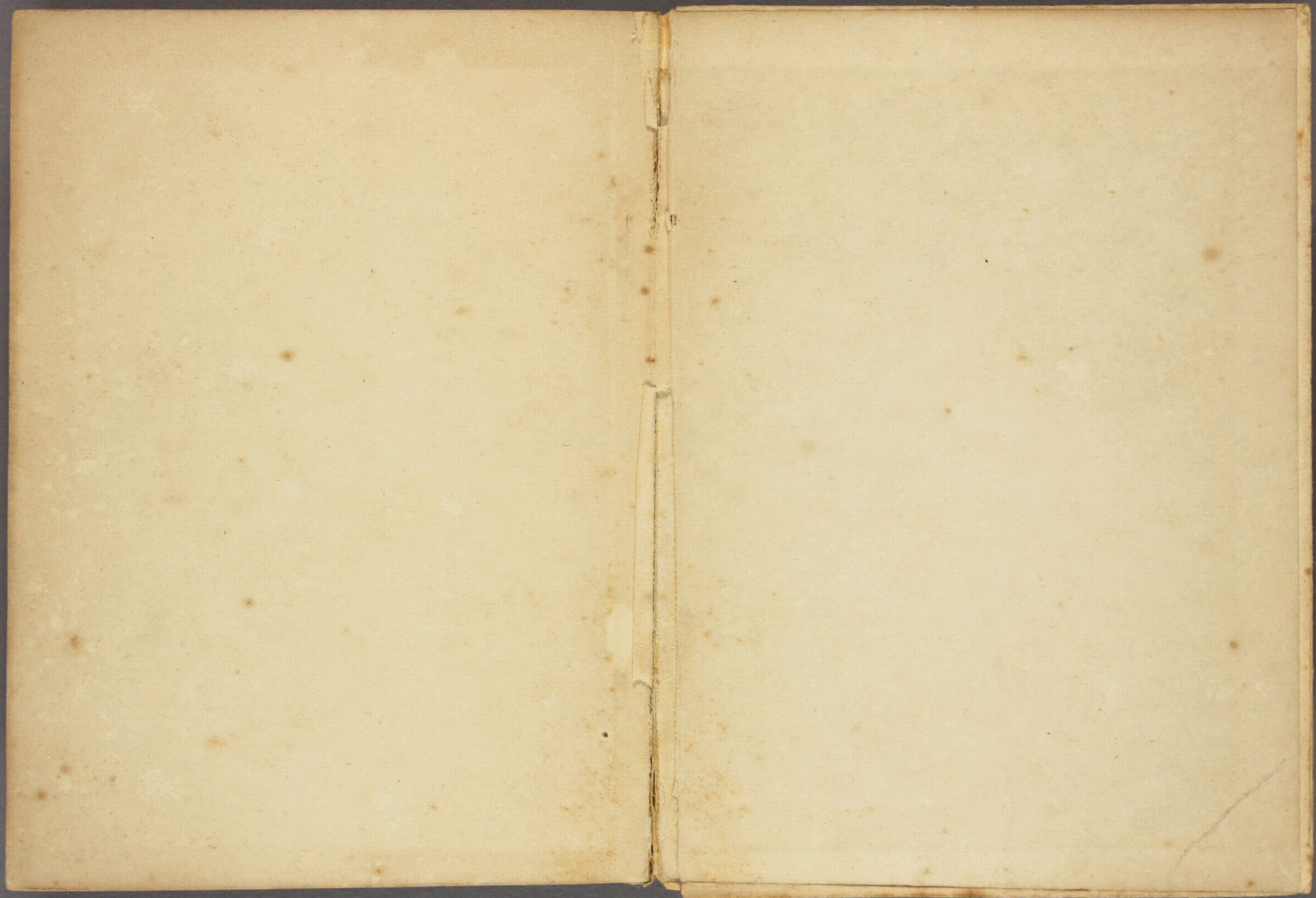


龍

人

有本
世水





詩集

旅人

有本芳水著

川端龍子裝幀

芳水詩集

序

わが第二の詩集「旅人」はなりぬ。この巻に收めたる歌の數數は、もとより色も香もなき名なし小草なれど、幼き人たちに摘まれて、とこしなへに匂はば、我心足りなむ。

「芳水詩集」二十三版をれる日

著者

集詩

旅

人

目次

旅の歌

志摩の海邊にて.....	二
湯の宿.....	九
津輕海峡.....	一四
阿蘇より.....	一九
讃岐より.....	二四
宇治にて.....	二九

高野山……………三
飛驒にて……………三
武藏野……………四
利根川……………四
伯耆より……………五
木曾川……………五
鳴門にて……………六
長崎にて……………六
伊豆より……………七
若狭路……………七

櫻月夜……………八
阿波にて……………八
多度津にて……………九
淀川……………九
信濃路……………一〇
佐渡ヶ島……………一〇
美作にて……………一一
關門海峡……………一一

小曲

落葉	一三六
春の小鳥	一三七
撫子	一三九
港にて	一四〇
船上哀歌	一四三
海鳥よ	一四四
さんたまりあ	一四五
寶石	一四六
五月ついたち	一四八
青い鳥	一五〇

鶯	一四二
寒驛	一四三
土	一四五
鶏頭	一四六
蟲の音	一四七
林檎	一五〇
雪降る夜	一五一
かりそめのなやみ	一五三
暮れ行く春	一五四
思ひ出	一五五

旅籠屋	居留地	噴水	こほろぎ	春の夜	その前夜	南 京 町	孔 雀	あ る と き	はまなすの花
.....
一八九	一八八	一八六	一八三	一八〇	一七九	一七八	一七六	一七五	一七三

か ら も り	芝居がへり	落 日	秋 の 日	狐	月 見 草	螢	と ん ぼ	山 の 湖	月 光
.....
一七二	一六九	一六八	一六七	一六六	一六四	一六三	一六〇	一五九	一五七

朝の禱り	一九一
春は逝きけり	一九三
夏菊	一九四
草笛	一九六
針	一九八
少年の日	二〇〇
ふる里の海	二〇一
蛇	二〇二
南國	二〇五
枢	二〇八

母の話	二一〇
赤い椿	二二二
除夜	二二三
故郷よ	二二五
乳母の里	二二七
小鳥よ	二三〇
稜のひびき	二三一
印度更紗	二三三
赤い血汐	二三四
秋の日	二三五

風	船	玉	………	三六	
著	音	機	………	三七	
か	も	め	………	三八	
並		木	………	三九	
ふる	里の	鳥か	げ	………	四〇
蓄		薇	………	四一	
柑		子	………	四二	
私	の	胸	に	………	四三
葡		萄	………	四七	

幼き歌

兔	………	四〇			
父	の	戦	死	………	四八

旅人目次
をはり

旅

人

有本芳水

歌 の 旅

志摩の海邊にて

安乗の岬鳥羽の海
渦まく波の底には
年古る大蛇棲むといふ
八重の潮路は紺色に
廣重のごと美しや。

紀路ははるけし熊野浦

濱ゆふ咲ける海べには
白き烟のたなびきて
海岸づたひはるぼると
志摩の國までつづくかな。

日はあたたかに風も無し
柑子みのれる畑中の
蒲戸さむき小家には
母や待つらむ海女の子の
海を眺めて佇みぬ。

渚なみに近ちかく下くだり立たちて
はてなき海うみを眺ながむれば
眞珠しんじゆとる子こがうた聲こゑに
海うみは音ねなくたそがれて
空そらはみどりの色いろ深ふかし。

うすくれなるの海うみ草くさの
花はなはほろほろ波なみに散ちる
干潟ひがたに刻きむ足跡あしあとの
波なみに消きえゆくさま見みれば

旅たびのうれひもいやまして。

くろ髪かみながき潜女くもりめは
はてなき海うみを指ゆびさして
千尋ちぢんの海うみの水底みぞに
沈しづめる球たまごの不可思議ふかしぎを
ほほゑみながら語かたるかな。

赤あかき夕日ゆふひのたゆたひに
やがて日暮ひぐさとなりぬれば

波に泌み入る磯寺の
鐘のひびきに海鳥は
故郷戀ひて啼きいでぬ。

貝や拾はむ珠や獲む
阿古屋の貝のうれしさは
千鳥しば啼くふる里の
海邊の家にわれを待つ
母と姉との土産にせむ。

すなどりの幸多しとて
漁師は町にあつまりぬ
浦曲にひびく笛の音は
少年の日のなつかしき
祭の唄をおもはしむ。

御座の灣西の方
悲しき海のたそがれは
北より来る旅人を
うれひて町に急がしむ

志摩の海邊の片ほとり。

鳥羽はよき町ふるき町

船着く家の片びさし

顔色くろき船子等は

月にむかひてしみみと

追分ぶしをうたふかな。

湯の宿

温泉の里の戀しさに

ひとり山越え来て見れば

春まだ寒き函根路は

吹く風襟につめたくて。

都より來し麗人は

峠の茶屋に駕籠寄せぬ

振袖ながき姫君は
鶯の音を聞きたまふ。

湯の香とめ來る晝さがり
ゆくさかへさの人人に
寄木細工を召せといふ
童の聲も興ありや。

杉の並木のぼり路
東へ下る旅人が

草鞋の紐をひきしめて
通りしさまも忍ばるる。

供の奴が道づれに
馬の背にして越ゆる山
黒髪ながきその人の
脚絆の色は赤かりき。

温泉の宿のうすあかり
欄干により眺むれば

狭霧は谷に行きかひて
山には暮の色ふかし。

馬につけたる鈴の音に
ほんのり春の日も暮れぬ
行き交ふ少女の顔色も
ただおぼろげの薄暗や。

都に名ある姫君は
少さき手鞠を編みたまふ

白き紫紅梅の
絲は膝邊にみだれ來て。

障子にうつる人の影
湯槽の中はしづかにて
空には月の色青く
湯の香の遠くにほふかな。

津
輕
海
峽

暮れ行く海の淋しさを
岬に立ちて見てあれば
夕日は今し遠方の
水平線に沈み行く。

海の入日の悲しさは
都に近き荒寺の

太き柱に身をもたせ
褪せし壁畫を見し心地。

今し消え行く鳥がけは
ばつと散り来る朱の色に
一度龍宮の殿と見え
二度珊瑚の宮となる。

都より來し旅の子は
巖にのぼり波に濡れ

海人に聞きたるいにしへの
蝦夷の話をなつかしむ。

外ヶ濱邊に立つ烟
烟は空を流れ行く
落木を拾ひ磯の家に
雁風呂を焚くそれならむ。

涙催す笛の音は
港にひびき日は暮れぬ

船の中には商人や
若きアイヌも交るらむ。

善知鳥神社の宮司等は
衣の袖をひきからげ
渚に近く火をとりて
枯れし藻鹽の草を焼く。

やがて夕となりぬれば
更月寒のうすあかり

空は氷雨を催して
海は寒さに身ぶるひぬ。

今宵とまらむ松前の
海路も今は灰色よ
津輕の子等は海邊より
帆をまきあげて歸りくるかな。

阿蘇より

春は來りぬ不知火の
海を渡りてなつかしく
山より村に越え來れば
さくらも咲きぬ阿蘇の路。

水うつくしき白川や
白壁見ゆる川添の

酒屋の軒につばくらは
巢をつくりつつ轉りぬ。

空は晴れたり風もなし
阿蘇へかへりの破馬車は
轍の音をとどろかせ
堤づたひに過ぎ行きぬ。

馬車の中には三四人
天草人や商人や

女役者は黒髪に
櫻の花をかざしたり。

菜の花つづく野の涯の
峠の茶屋に日はななめ
馬につけたる鈴の音に
亂れては散る山ざくら。

霞の遠の阿蘇の山
煙むくむく火を噴きて

みどりをこらす大空に
墨繪のごとく聳えたり。

ああ紅に燃ゆる火よ
雲ひくく飛ぶ阿蘇の野は
旅の子が吹く草笛に
ただ音もなく暮れ行きぬ。

温泉は近し野はひろし
山よりかへる人人の

筑紫なまりもなつかしく
中に少女も交るかな。

見れば何時しか空くらく
櫻の花の散るままに
悲しき心火の山の
聳ゆる空を眺めたり。

讚岐より

千石船に帆をあげて
春日うらうら島めぐり
海は霞にうすぐもり
櫻鯛うく波の上。

うす紫の島のはて
湖風さつと鳴るままに

龍の宮居のあらはれて
浦島の子もかへるらむ。

大島小島はなれ島
磯にまるべるうるはしき
小きき石のいろどりに
夢も美ぐしき春の旅。

船は着きたり讚岐路へ
多度津は歌によきところ

金比羅まゐりの人人に
通路の人も交るかな。

寺をめぐりてかへり来る

順禮の子の負笈は

兩親のある茜染

ひらりと風にひるがへる。

はるばる阿波にかへるてふ

若き女の藍賣は

ひかりまばゆく落つる目を
のぞみて涙流したり。

鳥もむなしくなりぬれば

詣づる人もまれまれに

志度の御寺に花散りて

老いにけるかなこの春も。

石段たかき金比羅や
ここは名だたる歌まくら

青葉あおばがくれにちらちらと
櫻さくらの散ちるもあはれなり。

宮みやの欄間らんまにとびて啼なく
鶯ういすの音ねのさびしさよ
ああ行ゆく春はるの悲かなしさ
われももろ共ともうたひ見みむ。

宇治にて

宇治うぢは茶ちやどころ歌うたどころ
美うつくしき名なにあこがれて
茶ちやを摘つむ唄うたの聞ききたさに
暮くれ行ゆく春はるを來きて見みれば。

空そら紫むらさきに晴はれ渡わたり
人ひとなき家いへの木こがくれに

鶯老をひた啼いて
春の恨をかたるかな。

山皆まろく水白く
茶畑多き宇治の里
緑の風の吹き起り
唄はつづきて聞え来る。

聞くにうれしき茶摘唄
いそがぬ路のつれづれに

聲はりあげて若き子よ
せめて一日をうたへかし。

京へは三里花びらを
うかべて流る宇治川や
白帆のかげにちらちらと
赤き日傘もほの見えて。

伏見へ下る旅人は
柳のかげに舞姫の

赤き扇を拾ひたり
宇治は茶どころ歌どころ。

平等院の白壁に
歌をしるさん人も無く
築地はくづれ垣朽ちて
春も空しく老いにけり。

顔色白き雛僧は
庭に散りしく木蓮の

花の一つを手にとりて
老いゆく春に涙しぬ。

落ちたる菟ふみしきて
深きうれひにふける時
霊地のほひたふとさに
若き涙も流るかな。

高野山

春を惜しみて恨み啼く
雫子の聲の寂しさに
險しき谷を見下せば
白雪深く湧き起る。

紀伊路はとぼし妹山や
春山をかこむ山山は

霞の遠にへだたりて
中を流るる吉野川。

杉の並木の木下闇
岩根ごとしくなりぬれば
瀧の沫に紅の
虹もありありあらはれぬ。

駕籠に乗る人下りる人
若き女は紫の

名もなき花を摘みとりて
みどりの髪にかざしたり。

昔は女人禁制の

姿をここにとどめけむ

今は往來の人しげく

古びて立てる女人堂。

『女人禁制の高野の山に

何故に女松が生えるぞや……』

檜松黒松その中に

女松しげるもしをらしや。

いよいよ高くなりぬれば

鉦のひびきの音すみて

秘密を語るもののごと

谷より谷へ銜しぬ。

ほろほろと啼く山鳩は
塔をしたふてかへるらむ

白き衣の雛僧は
石童丸を物がたる。

晝の雨降りしらしらと
法の燈はゆらぐとき
破れし築地の奥にして
つまぐる珠數のさびしさよ。

飛驒にて

空藍色に冴え渡り
國をめぐれる山山の
頂に見る白雪に
寒きを覺ゆ飛驒の國。

都を出でて夏の日に
神代ながらの谷あひの

温泉に入りて眺むれば
かげは野にひく二萬尺。

千年しげる黒松の

森より響く斧の音

一鳥啼かず風死して

精靈も出づと怪しまる。

草鞋に膝を折りしきて
泉の水をむすぶ時

しげる林の木の間より
透いても見ゆる村の家。

薬草とると日もすがら

山に入りたる少女子は

黒髪ながく赤染の

帯を斜に結びたり。

高きを競ふ乗鞍の
劍を植ゑたる頂は

うす紫の色深く
秘密の主も宿るらむ。

くすり賣るとて山越えて
富山より來し若人は
山路の暮に踏みまよひ
つひに歸らずなりしとか。

谷にまろべる白き骨
木暮の暗に火は燃えて

山分け行けば路もなく
狭霧は雨となりけり。

萬古の靈地岩室に
夜すがらひびく鈴の音
山の行者は言葉なく
眼を閉ぢて禱るかな。

武藏野

秋立つ日なりただひとり
林をよぎり丘越えて
眺めはてなき武藏野の
原をしたひてとめ來れば。

小鮎さばしる多摩川は
河原の石の色白く

煙流れて遠方に
秩父の山の見ゆるかな。

名も無き塚は荒れ果てて
小百合咲けるもしをらしや
丈に餘れる野芒は
桔梗とともにうら枯れぬ。

渡舟待つ人二人
なかの一人は女にて

亂れて長き鬢の毛に
もつれては吹く秋の風。

花摘み乗せてかへり來る
野馬の脊に日は落ちて
野はただひろく蟋蟀は
銀の音色の鈴ふりぬ。

小手指原は名のみにて
野寺の鐘に日は暮れぬ

かかる夕は何となく
若くて逝きし人戀し。

ああ野つかさに杖立てて
暮れ行く空を眺むれば
らす紫のその中に
涙を帯ぶる星一つ。

村の童戸によりて
父や待つらむひときを

利根川

笛の音すれば白壁に
月は淋しくほのめきぬ。

落葉の煙草刈りて
少女はあかき野の路を
栗毛の駒の網ひきて
森の小家にかへるかた。

水しづかなる利根川の
岸のほとりに佇みて
夕日の遠を眺むれば
常陸國原野はひろし。

月見草咲く河原には
白き狭霧の流れ来て

若き女の薄化粧
淋しき程にしづかなり。

野越え丘越え聞え來る
鐘のひびきの淋しさに
轉べる石を手にとりて
流るる水に投げやれば。

落葉焚くなる野煙は
かへらぬ水にかげ見せて

夢見ることくしづやかに
川の此方になびき來ぬ。

水浅黄なる川上を
唄聲たかくのぼる舟
舟の中には三四人
旅商人も交りたり。

かくて夕となりぬれば
堤のかげにほの見ゆる

農夫の家の軒端より
野邊に出で来る人ひとり。

ねんねんころり子守唄
里の少女は戸によりて
やがて野路よりかへり来る
母や待つらむ唄かなし。

堤につづく萱原に
風さやさやと渡る時

犬を連れたる少年は
我家を指してかへり来ぬ。

いつしかともる灯の色に
堤もくらくなり行けば
鈴蟲なきて月出でぬ
利根の夕のしづけさや。

伯耆より

雁のみ渡る伯耆路は
薄うら枯れ水瘠せて
山みな高く野は廣く
暇の路のとほくして。

旅の男は驛路の
はづれにひとり佇みて

公孫樹に落つる秋の日の
赤き光をかなしみぬ。

野火の煙の消ゆる時
枯れし柳の木の間より
夕日に映えて聳えたる
古城の壁をのぞむかな。

因幡境の山なみを
つつみてなびく夕雲は

鳥羽繪のごときいるひして
煙の中に消え行きぬ。

親にはぐれし巡禮は
鉦鳴らしつつ歌ひつつ
ひとり山越えふる里の
但馬をさしてかへるらむ。

村の祭の日もすぎて
長者が家の白壁に

散りて亂るるわくら葉は
火の粉のとぶに似たるかな。

伯耆少女が草を刈る
その聲聞けばなつかしや
色眞白なる顔は
笠につつみて見えねども。

旅籠の軒のむしろ戸に
秋風吹けば博勞は

木曾川

霜月の末浣の一日
木曾川や堤に沿ひて
破馬車は岐阜へ急ぎぬ
はるかなる野末の涯に
夕霧は白く浮びて
音もなく水は流れぬ。

鼻唄交り馬曳きて
啜づたひに歩み來ぬ。

雲のはたてに日は入りて
涙の如き星の色
馬は嘶き風寒く
鈴の音のみ聞え來る。

参宮の衆にかあるらむ
旅人は伊勢路に急ぐ
街道に並ぶ小家は
夜となれば門を鎖して
行燈のくらし灯影に
針はこぶ村の少女ら。

河沿の蓆戸寒く
いづこにか女の聲す
音も無く夜は更け行けば

ややありて月はのぼりぬ—
青ざめし病者のごとく
身ぶるひてのぞくもさびし。

うす暗き馬車の中には
木曾少女飛驒の商人
御厨子負ふ老いし六部は
珠數とりて念佛となふ—
月光の射し入るなべに
少女子の唇あかし。

打つづく狭霧の小野に
絶え絶えて砧の音す
夢よりも白く流れて
消えて行く川の遠には
唄の聲かすかに起り
鳴きつれて千鳥渡りぬ。

青じろき村の白壁
家は眠に入りぬ――
破馬車はかかる折から

音たてて橋を渡りぬ
馬宿に人の聲して
木曾川の夜は更けぬる。

鳴門にて

日は落ちて夕となりぬ
旅人は海にむかへり
金星は涙ぐましく
暮れて行く
空にひかりぬ。

灰色の浪路のはてに

なつかしき阿波の國見ゆ
岩によりふりさけ見れば
ふる里の
播磨はとほし。

むしろ戸の小家一村
潜女は空を眺めて
あはれなる歌をうたひぬ
かすかなる
節のかなしき。

この海の極まるところ
龍神の祟ありとて
船人はとほく進まず
あかき頬に
恐るかべぬ。

海越えて狭霧の中
ほの白く月はのぼりぬ
うづ潮の吹嘘く聲して
大層そらに

こだまをかへす。

海の戸に火の燃ゆる色
鳴門の子島の童は
銚とりて海に出でたり
銀色に

ひかる月かげ。

海鳥は啼く音もそらに
聲立てて何地行くらむ

磯寺の鐘をかぞへて
かへり来る
父待つ少女。

由良出でて鳴門のほとり
海底に沈む珠あり
うづ潮のこだまの音に
旅人は
涙ながしぬ。

長崎にて

白き雲空にうかびて
風も無き冬の晝すぎ
日の色は忍び足して
帆ばしらを
寂しく照らす。

ひとしきり唄の聲して

いづくにか錨いかり抜く音ね
立ちのぼる黒き煙けぶりは
蒼あせざめし
海うみを覆おほひぬ。

信號しんごうの旗はたのかなしさ
赤あかき帆ほの合あはの子船こぶねは
巨こほいなる汽船きせんのなかに
横よこはり
死しせるが如ごとし。

かすかなる海うみのため息いき
吼こゑゆるごと汽笛きふえの音ねす
むらさきの霧きりにかくれて
解とくす
大船おほぶねあまた。

船ぶねはいまかへり來きたれば
棧橋せきせうに人の群むね見ゆ
色いろくるき老船長らうせんぢやうは

甲板に
煙草を喫ひぬ。

海見ゆる坂の上より
歩み來る人の中には
和蘭陀の人も交れり
胸に見る
銀の十字架。

島原や繪踏の話

思ひ出を老女はかたる
眼の前に見ゆるまぼろし
ふり袖の
少女なりけり。

南蠻寺に鐘の音して
夢のごと海に消えたり
海岸の並木の木の葉
風なきに
散るが悲しき。

伊豆より

湯の香いざよふ更月を
白きくれなる桃色の
つらつら椿花咲きて
温泉の村の晝しづか。

空はみどりに晴れ渡り
あさく霞みて雲もなく

伊豆はよま國あたたかき
南の國をおもはしむ。

峠を越えて野の路に
馬の鈴の音音牙えぬ
都より來し客人は
温泉の里に通ふらむ。

野の城あとの葉やなぎに
ゆかしき風の渡る時

緑をこめて鶯は
聲も空しく啼き出でぬ。

温泉を流る野の川や
水は浅黄の色深く
村の少女は壁により
椿の花を輪につくる。

海に出づればみんなみの
波路の涯は灰色よ

火を噴くといふ大島は
指す方に浮びたり。

磯の小家の薄げむり
瓦焼くなるそれならむ
日は午にあたり南の
たかき御空に輝きぬ。

下田の港石廊崎
磯の少女は髪ながく

その紅の唇に
海の不思議をかたるかな。

若
狭
路

白き雲空に浮びて
風もなき春の晝すぎ
海ちかき濱邊の路に
旅びとの
群はつづきぬ。

遙かなる波路の涯は

紫にかすみて見えず
打ちつづく岬の遠に
しろき帆は
つづきて流る。

廣重の江戸繪に見たる
なつかしき海の思ひ出
折からを櫻みだれて
旅びとの
笠に散り來ぬ。

かかる日は磯の岩かげ
人戀ひて人魚も出でむ
貝の葉は波にもまれて
うつくしき
夢を守るらむ。

若狭路を丹後に越ゆる
春の目をわれも旅人
或時は丘にのぼりて

入り
うみの
色にこがるる。

色くろき海の翁は
ほほゑみて路を教へぬ
馬の脊に櫻また散る
海見ゆる
峠のほとり。

路に逢ふ人形づかひは

軒に立ち身ぶり可笑しく
對王と安壽をかたり
かなしげに
唄をうたひぬ。

行き行かば丹後に出でむ
由良の海由良の港は
思ひ出の夢のふる里
ものがたり
今ものこらむ。

櫻
月
夜

櫻散る春の夕ぐれ

一しきり歌をうたひて

腹しろき燕とび交ふ

加茂川や

岸邊のほとり。

繪日傘を袖にたたみて

色白き女わらべは

あかり射すかはたれ時を

橋に立ち

水を眺めぬ。

ほのかなる夕ぐれなれば

欄干の擬寶珠の上に

柳の葉金と赤とに

ひらひらと

散がる悲しき。

ややありて月つきはのぼりぬ
清水しみずと八坂やまつかの塔たに
いざよひて町まちを照てらせば
逢あふひとの

おもわなつかし。

美うつくしき櫻さくら月つき夜よを
紅べにをか買ひふ人ひとに交まりて
立たちどまる紅べに屋やが門かどや
何なにとなき

胸むねのときめき。――

立たちならぶ繪ゑ草くさ紙し店みせの
ぼんぼりに櫻さくら亂みだれて
赤あかき灯ひはほのにまたたき
何なに處ところにか
鼓つづみの音ねす。

かかると鐘かねの音ねして
ほのかなる月つきにひびきぬ

あゝ人はかかる夕ゆふを
悲かなしさに
僧そうとなるらむ。

金きん泥でいのちさき扇あふぎを
ひろひたる清水しみづ坂さかや—
思おもひ出での京きやうの春はるの夜よ
うつくしく
胸むねにのこらむ。

阿波にて

鶯ういす老らうをひた啼ないて
春はるも空そらしき阿波あはの國くに
ゆく雲くも白しろく野のは廣ひろく
みどりの風かぜの吹ふき起おこる。

紺屋こんやが倉くらの白壁しろかべに
燕つばめの歌うたを聞きく時ときは

暮れ行く春もなつかしく
あつき涙も流れ來ぬ。

讃岐境の山なみに

音なく落つる赤き目の

その淋しさに堪へかねて

野路を急ぐか旅人よ。

十萬石の城あとの
櫓に立ちて眺むれば

國を出て行く藍うりの
野路を急ぐも見ゆるかな。

水鏡びし沼に佇めば

姫の姿もあらはれむ

土にうもれし瓦にも

ふるき昔のほひあり。

吉野の川は水白く
流るる花も色褪せぬ

堤^{つみ}づたひに旅^{たび}人は
馬^{うま}の背^せにして急^{いそ}ぐらむ。

阿^あ波^ははよき國^{くに}歌^{うた}の國^{くに}

暮^くれ行^かく春^{はる}の悲^{かな}しさに

阿^あ波^はの鳴^な門^{かど}の物^{もの}がたり

歌^{うた}に涙^{なみだ}も流^{なが}るよ。

あ^あ野^のの子^こ等^らよ麥^{むぎ}笛^{ふえ}を

暮^くれ行^ゆく空^{そら}に鳴^ならせかし

ふる里^{さと}とほくはなれ來^こし
われはひとり旅^{たび}の子^こよ。

多度津にて

日は落ちて夕となりぬ
涙ぐむ星の光は
またたきて僅かに白し
なつかしき讃岐の國の
暮れて行く海の上には
ほうほうと汽笛の音す。

白き帆は風にうかびて
波もなき港の夕
物なべて悲しみふかし
帆をおろす船の男は
夕ぐれの海を眺めて
はろばろの船路を思ふ。
一しきり錨ぬく音
解纜す船のかげには
暮れて入る汽笛ひびきて

青ざめし空にふるひぬ
さすらひのとほき船路の
なつかしき多度津の港

漂泊の宿泊はやすし
船はてて陸にのぼりつ
海近き宿に來れば
掛行燈窓のあかりに
旅かたる巡禮ふたり
西國の衆にかあるらむ。

あゝかくて夜も更けぬれば
音もなき浪路のはてに
青ざめて月はのぼりぬ
折からを港のかたに
誰が子にか追分うたふ
なつかしき歌の一ふし。

追分のかなしき節よ
思ひ出の旅のさびしみ

西東宿にわかれし
巡禮は何地行きけむ—
なつかしき多度津の一夜
戀しさに涙ながれぬ。

淀川

しづかなる夏の月夜を
誰が吹くか笛の一ふし
村里は踊の夜にか
音たかく太鼓ひびきて
家の軒につるせる
提灯の灯かげうつくし。

ひとせの淀の月夜よ——
少年は母につれられ
夜の道を俥に乗りて
螢籠手に持ちながら
淀川や堤に添ひて
京より急ぎ來りぬ。

夏の夜の風は涼しく
水とほく白き淀川
川下に狭霧浮びて

のぼり來る船の櫓の音
船唄は月に流れて
かすかにも聞え來りぬ。

少年は母に抱かれて
船宿に俥を下りぬ——
掛行燈あかるき軒に
旅人はあまた群して
更くる夜を淀川下る
三十石の船を待ちたり。

京まゐり國の話
國なまはおくび交りに
聲たかく語り合ひしが
程もなく船出づるてふ
船宿の主の聲に
人は船に乗りぬる。

少年も母と共
京むすめ難波商人
交りつつ船に乗りしが

程もなく夢に入りけり
一とせの淀の月夜よ
少年はわが身なりけり。

信濃路

暮れかかる川の岸邊を
少年は俚に乗りて
だたひとり急ぎ來りぬ
野は廣く狭霧うかびて
夕暮の村は淋しく
蟲の音に暮れて行くかな。

わが父はいづくにゐます
わが母はいづくにゐます
故郷の信濃をあとに
少年は都にいそぐ
川近き奥津城どころ
拜みては涙こぼれぬ。

秋近き信濃の國は
野の面に小草亂れて
見さくれば蓼科山の

聳り立つ夕の空に
涙ぐみ光る夕星
父母の夢や守るらむ。

ややありて月はのぼりぬ
うらめしの月の光よ
家の灯かげは赤く
白壁はいくつか續く
俵いま橋を渡れば
汽車來る小諸は近し。

千曲川いざよふ水の
川くだる舟の中には
一しきり船うた起り
うた聲に涙流れぬ
ふりかへりまたふりかへり
少年は名残惜しみぬ。

汽車來る——さらば故郷
いざさらば今日を限りか

たらちねよしづかにおはせ
たらちめもしづかにおはせ
信濃路の秋はかなしく
少年は月に泣くかな。

佐渡ヶ島

雨もよひして空くらく
夕ぐもまよふ北の海
渚にひとりただみ
とほき浪路を戀ふるかな。
砂にまみれし貝がらを
拾ふも旅のすさびかや

くほし
嘴あかき海鳥は
鳴く音も空にわたり來ぬ。

雨をうらみてひとときを
聲は岬に落つれども
荒磯にむせぶ夕浪の
音ぞあまりに高ければ。

ああはるぼろの波の上
袖のひまより打ち見れば

夕浪むせぶ遠方に
ほのかに浮ぶ佐渡ヶ島。

眞野の入江はいづれぞと
磯の童にたづねれど
はるかに島を指して
たださびしらに笑ふのみ。

佐渡は四十五里波の上
童とともに連れ立ちて

巖いはまにのぼり眺なむれば
ふる里さとのごとなつかしき。

かくて夕ゆふとなるままに
島しまは秘密ひみつをかたると
荒あれし帆脚ほかに船人せんじんは
浪路なみぢを島しまにいそぐらむ。

ここにはひとり旅たびの子こが
島しまをそれかと眺なむれど

悲かなしや空そらの色いろくらく
涙なみだ流ながれて見みえわかず。

ああ北きたの海北うみきたの空そら
行ゆき暮くれたりし旅たびの子こは
胸むねにとどろく浪なみの音ねに
忘わすれもかねつ島しまを戀こふ。

美作にて

山やまみなたかく野のはひろく
赤あかく夕ゆふ日の照てる野の邊べに
馬うま嘶なげきて旅たび人は
南みなみをとほくかへり見みる。

伯はく者しや境さかひを立たち出いでて
因ゆゑ幡ばんのかたへ走はしる雲くも

雲くものひとつを眺ながめては
若わかき思おもひも寄よするかな。

堤つみの路みちはとほくして
牛うし曳ひきかへる童わらわの
少ちひさき肩かたに日ひは落おちて
後うしろ姿すがたも瘡やせたりな。

傳つたへ聞きくらく此この川がはの
源みなもととほく洞ほらありて

昔美童が物怪にとらはれしてふ物がたり。

輔祭の日も近き
鍛冶屋が軒に立ちよりて
村の少女に路とへは
をとめさびして笑ふかな。

木の葉散りしく山路に
鹿の角獲しと村人は

あまた集ひて口口に
よるこび語る山の幸。

ああ北のかた那義山の
谷の戸深く立ち出でて
戦のごと身ぶるひつ
とほく吹き来る秋の風。

ここには高き公孫樹の木
赤き夕日にかなしみて

關門海峽

人あまた汽車より降りて
からころと足音たかく
棧橋の汽船に向ふ
ほうほうと汽笛の音は
明方の空にひびきて
霧ふかく浪路は白し。

夢のごとくに散り來れば
見よ旅人に涙あり。
やがて夕となり行けば
青ざめわたる大空に
今宵はわきて金星の
涙ぐみつつ光るかな。

船室の窓にもたれて
旅かたる兩人の少女
姉妹か——容貌うるはしく
黒みたる瞳愛らし
電燈のあかるきかげは
眞白なる頸照らしぬ。

甲板の手摺によりて
打ち見やる門司の港は
朝霧の白きが中に

灯のみ赤く光りぬ
船いづる朝のひととき
旅人は酒や汲むらむ。

日出でなば錨をぬきて
外國の港に向ふ
かげ黒き大船あまた——
舷燈は水にかなしく
檣燈は空にさびしく
煙のみ黒くただよふ。

かへり見る馬關の港

青ざめし空はかなしく

停車場を汽車出るけはひ

櫻咲く春の日なれば

思ひ出の夢もあらむを

ひとりなる冬のさすらひ。

海峡の汽笛は悲し

かなたにはあわただしくも

からからと錆ぬく音

波に見る漣の一すぢ

いつまでものこれる見ては

ああわれは涙流れぬ。

曲

小



落

葉

今日も降りそそぐ落葉の雨
林には人ひとり通はず
青ざめたる空には
晩秋の入り日かなし。

ひとり枯れたる落葉を拾ひて
春のおもひでをくりかへし見る

ああ落葉の一つ一つに
わが愁のいと美しきかな。

色かへし落葉よ枯れし木の葉よ
汝は土にかへりたり
悲しみをこめて吹く夕暮の風
われは幹によりさめざめと泣きぬ。

春の小鳥

小鳥よ小鳥よ
春の鳥。

破れたる軒に來ては鳴く。
今日も昨日もふる郷の

暮れ行の春のかなしさに
涙催す夕まぐれ。

ああ故郷に父はなし

悲しく啼きそ春の鳥。

撫子

君が吹く銀笛のひびきに
ひとつ咲きたる撫子の花。

うすあかりさし入るなべに
まどろみの夢よりさめぬ。

うすくれなゐのさみしき花
しみじみと見つむるわが心

君が吹く銀笛のひびきに
一つ咲きたる撫子の花

港
に
て

港の丘の旅館にて
はるばると見やる朝の海

船の旗風になびきて
港には何ごともなし

港の町を行くマドロスの足どり
ふと立ちどまり海を見る時

異國の船のかなしき汽笛
岬のかなたよりひびき来る

船上哀歌

病やみはてし女をんなのごとく
川がは下に月つきはのぼりぬ
わが船ふねは櫓ろの音ねたかく
夜よをこめて川がはを下くだりぬ。

灯ともし渡る岸きの船ふねやど
二階により船ふねをよぶ聲こゑ

川がは上に千鳥ちどりしばなき
水みづ白しろく夜よぎりはふかし。

月つきかげをそびらにうけて
旅たびかたる巡禮じゆんらいふたり
老おいたるは父ちちによく似にて
眉まゆしろく柔和じやわなる顔かほ。

のびあがり見みやる川がはかみ
大方おほは夢ゆめにうつつに

月の夜を船に眠りて
川波の音のみたかし。

海 鳥 よ

夕日は落ちぬ日はくれぬ
波打際に佇みて
われただひとりもの思ふ。
暮れ行く海のかなしさに

とほきふる里眺むれど
涙ながれて見えわかず。

嘴あかき海鳥よ
せめて慰むすべあらば
波に來りてうたへかし。

さんたまりあ

あかき灯を手にして

ひとり見るさんたまりあの像。

さんたまりあのかなしき瞳は
われに何事をか騒ぐ。

眠られざる十二月の夜
月光は窓を洩れてかなし。

寶

石

君去りて
われひとりとなりぬ。

壘の上に見いでたる
指輪の青き寶石。

冬の夜を寂しく光る
ああわれひとり。

五月ついたち

五月ついたちつばくららは
紺屋が軒の白かべに
紺の衣きてをどるなり。

五月ついたち若人は
つばめの唄にふる里の
暮れ行く春を思ふなり。

青い鳥

五月ついたち少女らは
衣がへして半襟の
色の赤きを愛づるなり。

桐の花咲く五月の日
少し熱ある夕まぐれ
赤い入り目のさす窓で
何に啼くかよ青い鳥。

鶯

その歌聲を聞き居れば
あの妹をおもひ出す
小鳥よ小鳥カナリヤよ
春行く夕何を啼く。

人に知られぬかなしさを
胸に秘めたるわがこころ
春の行方を知ればとて
啼いてくれるなカナリヤよ。

今日も今日とて鶯が
晝をひねもす啼きくらす。

わすれかねたるわが心
少年の目を思ひ出す。

鶯、鶯わがために

寒

驛

聲はりあげてうたへかし。

粉雪降る冬の夜
山あひの寒驛に
時遅れ汽車來る。

信號の青き火
闇になる汽笛の音

山あひにこだます。

片隅のペンチに
眠りある女の
不安なる顔の色。

掛時計はその時し
ポンポンと二時をうつ
夜はふけて死せるごと。

ひと時を駈がしく
切符買ふ錢の音
人人はつづきぬ。

赤毛布の老人
顔蒼き女工
繭賣も交れり。

音立てて汽車來り
いつまでも粉雪降る

寒驛のああ夜は二時……。

土

いまふまば
いつふまむ
この土よ。

ひとはすぎ
人はゆく……。

鶏

頭

鶏頭の花の赤きに
わが思いよよかなしき。

鶏頭の花をし見れば
何故かわれはかなしき。

秋の日の赤く照る時

鶏頭はいよいよあかし。

蟲

の音

買物に出でませる
母を待つ秋の夜。

戸のうちに月光は
うすあかり射し来る。

厨くりやには人ひと氣けなく
きりきりと蟲むしの音ねす。

ただひとり繪本ゑほん見て
夜よを更ふかす淋しみしさ。

母上ははえが平常ふつじょう着ぎに
夜よのあいろつめたし。

行燈あんどんの灯ほかけは

またたきて白しろみぬ。

行燈あんどんにのこされし
母上ははえが針はりのあと。

針はりのあと見みつる時とき
又またしても蟲むしの音ねす。

母上ははえはかへり來きまさず
秋あきの夜よは更ふけたり。

林

檜

北國の親しき友が
送り來し赤き林檎を
眼の前に見たるうれしき。

北國の淋しき町に

ストーブをかこみて語る
友の顔うかびいづるも。

雪の降る夜

雪の降る夜はなつかしき
母の小唄を思ひ出す。

『ねんねの守は何處へ行た

あの山越えて里へ行た

里の土産に何もるた

でんでん太鼓に笙の笛……』

母^はが添^そ乳^ちの守^も唄^{うた}に
眠^ねつた頃^{とき}のなつかしさ。

枕^{まくら}もとにははりませの
忠^ち臣^{しん}藏^{ざう}の繪^ゑ屏^{びん}風^{ふう}や。

眉^{まゆ}うつくしく黒^{くろ}漿^{じやう}つけて
かつては母^はもわかかりき。

雪^{ゆき}の降^ふる夜^よはなつかしさ
母^はの小^こ唄^{うた}をおもひ出^だす。

かりそめのなやみ

かりそめのなやみに
ひとり伏^ふす床^{とこ}の中^{なか}
少し熱^{あつ}ある心^{こころ}もち。

さみしさのつれづれに

ひろげ見る地雷也の繪艸紙
くりかへしまたくりかへす。

外面には人氣なく

いつしかに日は暮れて
ほろほろと梨の花散る。

暮れ行く春

暮れ行く春のかなしさに

青い小鳥は啼くかいな。

青い小鳥のかなしさは
みどりの色の肌ざはり。

くれ行く春のかなしさに
青い小鳥は啼くかいな。

思ひ出

ふる里の海邊の丘に
月いづるさみしき一夜。

誰が吹くか笛の音して
夜更けてもその音やまず。

少年は笛の音聞きて
とめどなく涙ながしき。

思ひ出のさみしき一夜

少年はわが身なりしか。――

月
光

月光を見ればかなしく
何故か涙ながる。

月光の中に國あり
なつかしき愛のふるさと――

月光げくわうの流なるなべに
わが思おもひいよいよさびし。

月光げくわうを見みればかなしく
何故なにか涙なみだながるる。

山
の
湖

日ひは暮くれて狭せまぎりは白しろし
地ちへかぬる山やまのさびしさ

いづこにか人ひとをよぶ聲こゑ。

ながめやる山やまの湖みづうみ
くれて行ゆく空そらを眺ながめて
亡なき人ひとを思おもひ出いづるも。

夕ゆふぐれの空そらのかなしさ
潮みづうみのいろのさびしさ
ただひとり眺ながめてありぬ。

と

ん

ぼ

赤いとんぼが秋風に
吹かれて岸にとべる時
川の向ふの酒倉に
秋の入日のかなしけれ。

秋の入り日のかなしさに
渡し舟まつ人ふたり

なかのひとりは女にて
きりり結んだ晝夜帯。

まだあかるきに瓦斯の火の
水の面にながれ来て
岸の柳のひらひらと
うすき光にひるがへる。

やがて夕となるままだに
赤いとんぼのかなしさは

風かぜに吹ふかれて水みづの面おもを
いづこともなく去さりにけり。

螢

夏なつの夜よを汽き車しゃにのりけり
汽き車しゃの中なかひとりの少せう女にょ
螢ほたる籠かご手てに持もちながら
かたはらの窓まどによりたり。

片かたゑくほ眉まゆうつくしく
色いろしろく面おもわうつくし
そよ風かぜの吹ふき入いるなべに
おくれ毛けは頸うなじにかかる。

夜よの汽き車しゃのなかのつれづれ
いつ知しらず言こと葉はかはして
美うつくしき少せう女にょはわれに
二ふたつ三みつつ螢ほたるを呉くれぬ。

京ちかき宇治の一夜よ
月あかき夏の夜なりき—
二十歳のむかし思へば
その少女えこそ忘れね。

月見草

海ちかき病院の庭に咲く月見草
日は落ちて海の灰色に暮るる時
一人の少女は病院の窓により

暮れて行く海を眺めたり。

あかき唇に見るかなしきほほゑみ
少女はまた空を仰ぎぬ—
今宵はわきて金星の色白く
涙ぐむ少女の瞳にうつる。

庭に咲く月見草のいろひに
彼女はふと亡き母を思ひ出でたり
青ざめゆく海のためいき

狐

彼女もかすかなるためいきを洩らす！。

ふる里の
煙の小野に。

月の夜を
出て啼く狐。

秋
の
日

月うるみ
人里とほし。

何を啼く
ちさき狐よ。

秋の日に友の家訪ふ
わが友の病はおもし。

秋あきの日ひの晝ひるのしづけさ
庭にわちかく鶏けい頭とう咲さけり。

鶏けい頭とう花はなああ鶏けい頭とう花はな
殊こと更さらに赤あかきがかなし。

落
日

旅たびにして山やまを越こえしが

日ひはしづむ黄き草そうのうへに。

いやはてにとほき國くにあり—
その國くにに落おちて行ゆくらむ。

涙なみだして今いまぞ見み入いりつ
かへらざる赤あかき落お日ひを。

芝居がへり

雪はちらちら降りしきる
大川端のうすあかり。

芝居がへりの一むれに
女も交る話聲。

水にうつりし瓦斯の火の
青くながる夜中すぎ。

白き素足のあしどりは

蛇の目の傘の女づれ。

火の見櫓を見てあれば
雪はちりこむ襟元へ。

濁れる水は音もなく
ただ真夜中を流れ行く。

大川端のうすあかり
雪はちらちら降りしきる。

かうもり

かはたれ時のうすあかり
ひとり家路の戀しさに
遊びつかれて秋の目を
わが家の軒にとめ來れば。

逢魔が時の習とて
二つならべる米倉の

暗きかげよりかうもりが
あわただしくもとび出てぬ。

わが家ながら入りかね
如何にせんかと思ふ時
格子の内より母君は
われをみとめてよびましぬ。

はまなすの花

海邊の丘に咲けるはまなすの花
夏の日は今午にあたり
南の空にかかれり。

今海岸を此方に歩み來りし旅人は
つかれたる足をとどめて
はまなすの赤き花を見出でたり。

海ははてしもなく青くつづきて
眼の前にまぶしく光れば

はまなすの花はいよいよ赤し。

あ る と き

赤い粉雪のふる宵は
大きき地震のありといふ――。

祖母は眼鏡をとりはづし
地震の話ものがたる。

孔

雀

母は針もつ手を止めて
祖母のはなしに聞きほれぬ。

しんしんと泌む夜なかすぎ
外には雪の降る音す――。

藤の花咲く庭先に
父が飼ひたる白孔雀

こぼれし花をついばみて
尾羽うちふるが美しき。

深紫の藤の花
織りてゆかしき藤浪に
燃えぬる瞳翼たてて
庭のおもてを歩み來ぬ。

晴れたる夏のまひるすぎ
みどりをこむるそよかぜの

白き孔雀の羽を吹けば
泉の水にほひあり。

南 京 町

南京町のたそがれ
支那風の赤き建物の二階より
暮れそむる港を見てある少女。

夕暮の港にはここに彼處に汽笛悲しく

此方棧橋には幼子の母を慕ふごとく
かへり來るあまたの小舟。

少女は海を見て何をかおもへる
みどりの空にはくるき烟ながれて
やがて夕づつと共に紫に暮れ行く、

そ の 前 夜

雪ふるいりすまの前夜

たかくひくく教會の鐘開ゆ。

少年は鐘の音にふと目ざめたり。

かたはらに眠れる母の顔——
少年はほほゑみてまた眠につきぬ。

春の夜

春の夜なりき姉ぎみは
來よとてわれをつれたまひ

月うつくしき春の夜の
鐘の市に出でましぬ。

さくら月なりおぼるなり
ゆきずりに逢ふ少女子の
袖にひめたる香函の
にほひは何のたはぶれか。

軒をならべし鐘店に
赤き灯はうつくしや

銀短冊にひざくらの
亂れて咲けるあでやかさ。

店にならべし内裡雛
雪洞ゆらぐ春の夜を
雛をかふ人さくら人
薄化粧せる人もあり。

雛うる店の姉むすめ
名もお町とてうつくしく

鳥田に結ひし黒髪に
簪の花も艶なりや。

あこがれ心地ゆめ心地
春の一夜を雛市に
姉につれられいでゆきし
幼きころぞおもはるる—。

こほろぎ

ふる里の
秋の一夜の
なつかしき。

外面には
白き霧降り
酒倉に
夜すがら聞ゆ
唄の聲。

月さすなべに
行燈の
ほかげしたひて
啼きいでし
秋の夜なかの
こほろぎよ。

去年をわすれず
出できたり
うたひいづらむ

こほろぎよ。

こほろぎこほろぎ

汝をおもふ。

噴

水

公園の春の晝すぎ

噴水の水はしたたり

ここかしこの花園には

わかきバラソルの女行き交ふ。

花園の花の赤きに

美しく瞳燃えぬる

春の小鳥は木立に囀り

何を鳴くうたのしらべよ――

彼方池にのぞめる洋館には

晝をひねもすピアノ鳴りひびきて

緑のカーテンは風なきにゆるる

居留地

あゝ噴水の水のしたたりの美しきかな。

アカシヤが風にみだれて散るぞえな
居留地のかはたれ時のうすあかり。

カナリヤが二階の窓に啼くぞえな
居留地のかはたれ時のうすあかり。

旅籠屋

坂つきし土手のつづきの
村はづれ鍛冶屋になり
旅籠屋ぞさびしく立てる
夕風は席戸吹きて
片側の林に鳴りぬ。

漂泊のやどりもとめて

商人あきんどや蘭買女まらんかみ

あるはまた老いし巡禮じゆんれい――

行燈あんどんのほかげの前にまへ

合宿あひどのやすき語かたらひ。

月光げつくわうのさし入いるなべに

壁かべちかくこほろぎ鳴なきぬ

巡禮じゆんれいは脊せせをかがめて

各各おのおのの面おもてもち眺なめ

あはれなる話はなしにふける。

更ふけ行ゆけば雨戸あまど繰くる音おと

人ひと人の枕まくらにひびく

落葉おちばのみ月つきに亂みだれて

夜よはもなかの馬うま小屋こや

かたかたと蹄ひづめの音おとす――

朝の禱り

黎明れいめいのひかりに

すべての物ものみなあたらし。

みどりの森には
今し朝の鐘なりいづ、

美しき小鳥は
朝の歌をうたふ。

人はみな額に手をあげて
まばゆき太陽の光を仰ぐ。

幸福を祈るところに
今少女の胸は躍る。

ああ人人よ喜びて唱へよ
朗かなる朝の歌を――。

春は逝きけり

美しき少女は逝きぬ
小鳥なく春の夕ぐれ

ああかくて春は暮れ行く。

何時の間いつまに春はゆきしか
めぐり逢あふ春はるやいく度たび
恨うらみのみ胸むねにのこるも――

夏
菊

朝あさの眼めざめの
うれしさに。

君きみがたまひし
夏なつぎくの。

いとしき花はなを
見みてゐたり。

ああなつ菊きくの
むらさきの。

花はなのいとしさ

なつかしき。

夢の言葉も

おもひ出づ。

草

笛

おほかたはみどりとなりて
五月の野草笛聞ゆ。

五月の野かなたの丘に
わが父は眠りますなり。

畑中のみどりのみちに
幼な兒は草笛鳴らす。

草笛の幼き歌に
故知らず涙ながるも。

針

姉あねが落おせし
針はりのいろ。

白しろくひかりて
いたいたし。

瞳ひとみにしみし

針はりのいろ。

畳たたみのうへに
紅もみ絹ぬい裏うらの。

赤あかくにほふも
なつかしや。

ああゆく春はるの
室むろのうち。

少年の日

月光は青ざめてすすり泣く
われはひとりその光をあびて
少年の日のむかしを思ふ。

少年の日の戀しさに
涙はとめどなく流れ来る。

ふる里の海

ふりそそぐ月光のなつかしさ
夜もすがら少年の日の思ひ出に泣かまし。

雪降る冬の夜なかすぎ
わが乗る船はふる里の
播磨の海にかかりたり。

通ふ千鳥の啼く聲に

ほのかに島の火もしらみ
雪に消えゆく淡路しま。

播磨はわれのふる里よ
飾磨の海にともる灯の
その色見れば涙ながる。

蛇

春の日なかを

蛇が。

倉のかげより
匍ひいでぬ。

幼きころ
縁先に。

蛇の眼を
見つめたり。

蛇くまはの目めの
おそろしさ。

かくて夕ゆふと
なれる時とき。

蛇くまはの眼めを
おもひ出いで。

母ははにすがりて
泣なきもせし。

南

國

水みづぬるむ
小沼こぬまのほとり。

とかけ匍はふ
夏なつの晝ひるすぎ。

太陽たいやうのひかり
まばゆく。

野ののはてに
煙けむり立ち立つ。

野ののはては
海うみにつづきて。

紺青こんせいの
波なみはきらめく。

とぼとぼと
歩あゆみつかれて。

彼方かなたより
旅人たびびと來きたる。

瓦かはら
やく

小家のけむり。

旅人は
煙を見たり。

南國の
夏のひるすぎ—。

柩

水無月の夕ぐれなりき
わが父の柩の前に
はらからは涙をたれぬ。

線香の白き煙は
室内にうすく流れて
またしても涙こぼるる。

いたましき柩うつ音
ありし世のつひの響か

かなしさに眼を閉ぢぬ。

柩ひつぎの音ねききつつあれば
窓まどに来て小鳥こどりぞ鳴なける
何を啼なくあはれ小鳥こどりよ――

母 の 話

雪ゆきの降ふる夜よになりぬれば
母ははの話はなしを思おもひ出す

雪ゆきの降ふる夜よの戀こひしさは
中將ちゆうじやう姫ひめの物ものがたり。

話はなし上手じやうずに聴ききほれて

あつき涙なみだも流ながせしが

ぬぐふ間まもなく泣ないじやくり

母ははの口くち許もと見みつめぬる。

母ははと火こ燧たきにさしむかひ

話はなしなかばを夢ゆめに入いる

赤

い 椿

しんしんと泌しむさみしさに
雨戸あまどたたきそ小夜さよの雪ゆき。

君きみが手にせる紅血べにちに
赤あかい椿つばきのなつかしや
赤あかい椿つばきの花はなよりも
その唇くちびるのうつくしさ。

除

夜

父ちちも寝ねぬ
母ははも寝ねぬ。

しかれども
われは眠ねむらず。

指ゆび折をりて

わが年とし數かずふ。

かくて夜よは
更やけ行ゆくままに。

まどろみて
眠ねるとすれば。

百ひゃく八はちの
鐘かねぞ聞きゆる。

故郷よ

ふる郷きょうの阜み月つきの野邊のべを
見みはるかし涙なみだながれぬ
空そらたかく雲ひ雀ぼあがりて
いづこにか草くさ笛ふえきこゆ。

ああ父ちちよまさきくおはせ
ああ母ははもまさきくおはせ

ふる里をとほく去る時
ふりかへり見れどあかぬも。

かへり見る家の白壁
母上は戸によりまして
わが姿見おくりたまふ
なつかしき母の面かげ。

霞立つかしの丘も
水きよきこなたの野邊も

大方は夢にうつつに
何時かまた汝と相見む――。

なつかしき父にわかれて
なつかしき母にわかれて
ふる里をとほく去るとき
故知らず涙ながる。

乳 母 の 里

七里山越え
はるばると。

乳母をたづねて
來は來たが。

乳母はながらく
わづらうて。

祭の晩に

死にきとぞ—。

乳母の墓邊を
とめくれば。

晝のさみしさ
鶯が。

乳母の墓邊で
啼いてゐた。

小鳥よ

小鳥よ小鳥
うらやまし。

うまれ故郷の
戀しさに。

小鳥となりて

春の日を。

聲はりあげて
うたひたや。

梭のひびき

今日も昨日も
少女が。

きりりけたいた
機を織る。

櫻のひびきに
ばつちりと。

一つひらいた
紅椿。

悲しい眼つき

やぶ椿。

印度更紗

異國の友が送り來し印度更紗
春の夜の灯かげに色うつくし。

あはれ印度更紗。

手ざはりもいよ心地よく

赤い血汐

春の夜に殊更ふさはしきかな。

芝居で見たる勘平が

赤い血汐のいたいたし

幼な心の恐しさ

芝居で泣いたをかしさよ。

秋の日

赤い日の照る秋の日に
飴屋の笛の聞えくる。

幼き子等は三四人

とんぼつりつつ遊びしが。

飴屋の笛にそぞろぎて

家路戀しくかへり來ぬ。

風 船 玉

風に吹かれてまひあがる
風船玉の色見れば。

何かは知らずわが心
高いみそらのなつかしや。

高いみそらをいづくまで
風船玉は行くである。

蓄 音 機

薄雪の降る夜—
何處かで蓄音機の聲がする。

蓄音機の聲は
さらさらと散る雪に交つて—

しんみりとした
さみしい夜――

か

も

め

水みづのうへとぶかもめどり
大川おほがわ端はたの目めぐれどき
君きみを待まちつ間まのうすあかり
水みづを眺ながめてただみぬ。

並

木

初はつ夏なつの並なみ木きのかげを
馬車ばしやきたるわだちをどりて。

そよ風かぜは窓まどに吹ふき入いり
青あおぞらに小鳥こどりうたへり。

見みはるかす阜ふた月つきの小野のの

まひる日に喇叭ひびきぬ。

初夏の並木のかげを

ああ馬車はいづくへいそぐ。

ふる里の島かげ

南なるふる里の島かげ

何人がうつしうゑけむ。

年ごとに色もかはらず

くれなるの椿花咲く。

南國の海のにほひに

あたたかく異香薫じて。

美しき花のかげには

羽あかき小鳥啼きいづ。

ああ小鳥何をうたふや

南^{みなみ}なるふる里^{さと}の島^{しま}かげ—

薔

薇

色^{いろ}あせたる
薔薇^{しやうび}の花^{はな}よ—

ある時^{とき}は
夜の舞^ぶ踏^{たぎ}に
つれられて。

ある時^{とき}は
君^{きみ}がかざしに
つまれしが—

色^{いろ}あせて
捨^すてられたる薔薇^{しやうび}よ。

薔薇^{しやうび}よ薔薇^{しやうび}よ
われは汝^{なんぢ}をかなしむ。

柑

子

わかき日に君が植ゑたる
むしくゆる柑子の木の實。

そよそよと微かぜ吹けば
色いみじ黄金の柑子。

冬の日は海にあかるく

潮の香に胸はときめく。

なつかしき柑子の木かげ
たづねきてむかし思ひぬ。

私の胸に

私の胸に
鳥が啼く。

昨日も今日も
鳥が啼く。

青い小鳥よ
何故に啼く。

知るや知らずや
わがこころ。

葡

萄

棚にみのりし
葡萄の實。

熟する頃を
待ちかねて。

三つ四つと

歌 き 幼

かぞへ見^みて。

小^こゆび折^をりつ
つ
待^まちわびし。

幼^をきころの

なつかしや。

兎

私の好きな與茂作爺は
『坊ちゃんこれがお土産だ
家へ行つたら姉さんと
二人で育ててお呉れな。』と
可愛い可愛い眞白な
兎を私に呉れました。

貰うた兎を抱きかかへ
馬の脊に乗り峠を越えて
爺やに送られかへる時
赤い花咲く向ふの山で
雉子が一聲啼いたので
私はびっくり驚いた。

峠は今が花ざかり
風もないのにちらちらと
花は亂れて散つて来る

麓の茶屋の婆さんは
わたしの抱いた小兎を
わしに呉れろと言ひました。

馬の蹄のその音と
ちやりちやりと風に鳴る
鈴の細音に小兎は
ぼつちり赤い瞳をあけて
おどろく様に私の
顔をしみじみ見つめます。

我家にちかい驛道
伊勢へまゐりの人人が
『やあつとこせ』の掛聲に
音頭うたつて來ましたが
皆の人は唄やめて
抱いた兎を見ろのです。

菜種花咲く野中の徑
ふわりふわりとたんぼぼが

春の盛りを語り顔
馬の脊から村村見れば
朱塗の塔は繪のやうに
霞の中に浮いてゐる。

乗合馬車はがらがらと
温泉宿から來かかつた
のぞいて見たら窓による
若い女は一やうに
櫻の花をくろ髪に

さしてゐるのが見えました。

ほんのり赤い日ぐれ時
家にかへると姉さんは
よいお土産と喜んで
兎の口にくれなゐの
臙脂をなすつてつけました
兎はちつとしてゐます。

夜になつたら小兎は

母屋にともる赤い灯を
珍らしさうに見ましたが
やんがて夜が更けますと
家路の母が戀しいか
耳を垂れつつ啼きました、

鼓の音にはらはらと
櫻の花は散つて来た
私は可愛くなつたので
兎の脊に姉さんの

舞衣かけてやりますと
兎は夢に入りました。

父の戦死

林も暮れぬ野も暮れぬ
村のはづれの細道を
手を取りながら兄弟は
わが家を指して
かへり行く。

沼の向ふの林では

白い小鳥が翼すりて
何やら悲しい聲で啼く
小鳥も家が
戀しいか。

赤い灯はちらちらと
林の向ふについてゐる
弟よ早く歸らうよ
家には母が
待つてある。

空には白い夕星が
涙ふくんで光つてる
遅れがちなる弟は
林檎のやうな
頬をあげて。

お國のために戦争に
お出でなされた父さんは
如何してお出でになることか
私はそれが

聞きたいの。

屹度元氣な父さんは
栗毛の胸に跨つて
矢弾が霞と降る中を
厭はず進んで
お出でてせう。

それ聞く兄は言葉なく
弟をしつかり抱きかかへ

赤い唇かみしめて
涙をはらはら

こぼしつづ。

お前は何も知るまいが
戦にお出でた父さんは
飛び来る敵の弾丸に
命つて戦死

なされたの。

私はそれを母さんに
聞いたがその時母さんは
私を膝に抱きしめて
お前に言ふなと
おつしやつた。

ああ弟よ父さんは
斥候に行つて歸りがけ
赤い夕日の照る丘で
遂遂戦死を

なされたの。

だけれども元氣な父さんは
ただ『萬歳』を名残にて
赤い血汐に染まりつつ
笑うて戦死を
なされたと。

萬歳となへた父さんの
お顔はありあり見るやうな

それは手紙で父さんの
隊の人から
言つて來た。

私はそれを母さんと
行燈の前で見たのだが
その時お前はすやすやと
何にも知らずに
寝てゐたの。

お山やまに夕日ゆふひが落おちて行ゆく
落おち行ゆく夕日ゆふひは悲かなしいが
それでも明日あしたになつたらば
きらきら光ひかりつて
出でるものを。

けれども私わたしの父ちちさんは
亡なくなりなされてそれからは
見みたくも見みること出で来まないの
こんな悲かなしい

ことはない。

私わたしが泣ないたら母かみさんは
それでお前まえは如何どうするか
大おほきくなつたら軍人いくさびとに
なつてお國くにに
盡つくすのよ。

それが第一だい孝行かうかうと
涙なみだながらに言いはれたが

弟よお前も軍人になつてお國に盡すのだ。

それから私の母さんは髪を切り捨てなされたの家にまつた佛壇の位牌は父さんの位牌だよ。

聞いた弟はたちまちに兄にしつかと抱きついてそんなら私の父さんはとうとう戦死をなされたか。

私は玩具も入りませぬどんな悲しいことにでも屹度泣かずにゐるでせう泣いては大將に

なれはせぬ。

言ひつつ小さき手を合はせ

兄さんあれが上の上の

あの星様が父様か

父さん僕は

泣きはせぬ。

それ見た兄はまた更に

弟を両手に抱きしめて

ああ弟よよう言ふた

二人で大將に

なるのだよ。

小鳥の聲に日は暮れぬ

家には母が待つてある――

赤い灯はちらちらと

向ふの家に

ついてゐる。

集詩
旅人
を
は
り

集詩
人旅

大正六年一月三日印刷
大正六年一月七日發行

定價四十五錢

著者	有本歡之助
發行者	增田義一 東京市京橋區南紺屋町十二番地
印刷者	佐久間衡治 東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所	株式會社 秀英舍 東京市京橋區西紺屋町廿七番地
發行所	實業之日本社 東京市京橋區南紺屋町十二番地 振替口座東京三二六番

◁ 製 複 許 不 ▷

日本少年 主筆 有本芳水作 竹久夢二畫

芳水詩集

袖珍判美本 定價十四錢 郵稅六錢

▼好評二十三版………▲

粉河寺

馬の背にして返り見る
春暮れ方の紀伊の國
松原かげに旅人の國
菅笠あまた行き交ひて
赤き夕日は橋の
花咲く上に匂ふかな
夏は熊野の浦すぎて

句ゆかしく渡り來ぬ
阿波より來る藍賣は
村の紺屋を立ち出づる
燕の歌にふる里の
暮れ行く春を思ふらん

伊勢より

山紫に水青き
伊勢はよき國七月を
宿場宿場の跡とめて

來ればここは龜山や

檜小笠の旅人が
憩へる茶屋に日も永く
馬子の小唄に曇るてふ
鈴鹿は高く聳えたり
阿濃の松原砂白く
阿漕が浦の浪さびし
あづま繪に見る廣重の

海の色のみ青くして

桑名にかへる船の帆の
白きも嬉し夏の日は
紫紺色なる大空の
南に白くかかりけり

道づれなりし馬追は
手綱うちふり路をとく
伊勢は津でもつ賑の
阿濃津は程も遠からず

螢

夏の日なかの螢かご
赤い頭の恐しや

死人のやうな胸の色
紫紺の背の肌ざはり

つめたい銀の白い火は
喇口な啞を思ひ出す

鶯

今日も昨日も鶯が
青き窓邊に來ては啼く
ほんに淋しい我心
鶯鶯何故に啼く

芝居裏

月青き夜の芝居裏
廻舞臺の掛聲きけ
何かは知らずわが心
悲しうなげに泣かれぬる

かきつばた

廣いお池のまん中に
一本咲いたかきつばた
夜になつたら美しい
紫紺の夢を見るである

わが來し方を

ああ破れ行く悲しみに

せめては遠きふる里の
音きかばやと砂に伏し
ふりさけ見れど聲高き
波に歌ひて浪に去る
海の小鳥の小唄のみ

今は術なくただひとり
少女の如く首垂れて
巴里満城歡樂の
うら若き目を忍ぶれど
色さめ果てて古びたる
古き繪に似る幻よ

モスコの丘の火の色も
ワートルの血の色も
見はてぬ夢と朽されて
残るは遠きいにしへの
我を抱きしふる里の
母の腕の白き色

(收むる所)
一百二十七編

少女の友筆 星野水裏先生二大詩集

口語詩集 宵のあかり

再版

定價五十錢 郵税四錢 袖珍全一冊 裝幀頗優美

本書は水裏先生獨特の聲調を以て、少年少女の憂愁と情調とを歌へる最も斬新奇拔なる口語新體詩なり。而も血あり涙あるの描寫、其の整然たる語調は、吟詠に適し、一誦餘韻嫋々たり。用語亦平易なれば、苟くも文字ある者は何人も面白く讀み下すを得。

内容一般

□ジョンやもう歸らうよ □手を縛られた女 □豆挽きの歌 □健作のわかない健作の家 □千鳥呼ぶ福松の笛 □走れよ走れよ自働車よ □筑前博多の帶しめて □評判の鳥屋 □行く春の宵 □千圓のラヂウム外四篇

口語詩集 赤い椿

椿

近刊 二月發行

□竹久夢二先生三名著□

繪入小唄 どんたく

定價金五十錢 郵税四錢 十八葉入 中判頗美本

本書は夢二氏の傑作、見るからに可愛い繪入小唄集である。ふくみかゝり、ゆつたりしたうららかな何物かを暗示せんとする如き気分、氏の書風は已に定評がある。更に唄の詩情に富む。吾等は、つの間にかチャームされてしまふ。コロダイブ刷挿繪十八葉と六十餘編の小唄を収めた本書は、又氏獨特の表装に包まれて、如何にも上品に出来てゐる。手に持つ丈でも氣持がよい。

繪入小品 草の實

定價金七十錢 郵税六錢 口繪數葉 中判夢二式 新型美本

本書は氏の前著「どんたく」の姉妹篇であつて前者は小唄集、後者は即ち氏の斷集である。短いもの、長いもの、可愛いもの、美しいもの、悲しいもの、嬉しいもの、合せて凡十有餘。氏の繪は天下獨歩の稱ある如く、氏の文も亦他の真似難い獨特の世界である。是等數多の小品は、精巧な挿繪に飾られて一層の麗さを増してゐる。一讀誰でも美しい印象を深く刻みつけられるであらう。

ねむの木

芳烈な藝術味の溢れた夢二氏の新作繪入童話集である。愈々圓熟の境に入りたる氏の苦心の作たる本書は、上掲の二者とはまた變つた気分情味畫趣の新鮮味があつて、忘れられぬつかしいものである。

美濃挿繪澤山

□瀧澤素水先生三大傑作□

壯絶快絶直に讀者の心に訴へ血を湧かす著者の獨壇上

定價各冊三十五錢
郵税各冊四錢
四六判上製美本
裝幀頗る瀟灑

版五十
冒險小説 怪洞の奇蹟

鬼神も恐るる怪洞の裡へ捉へられた少女あやとこれを救はんとして怪洞の中に忍び込み、驚天動地の大活動をなせる少年光雄と、數奇な運命を描くに熱烈火の如き文章を以てす。壯絶怪絶の著也。

版十
怪奇小説 難船崎の怪

如何なる大船も通りか、つたが最後、必ず難船する難船崎、剛といふ一人の使少年が、ふとした事から端緒を得て、此探検を思ひ立ち、千辛萬苦の末遂に海中に於ける一大陰謀を暴く。物語、一讀血湧き肉躍るの概あり。奇絶怪絶。

版十
冒險小説 生か死か

俠勇の一少年あり。名を賢蔵と、ふ單身深山に入つて幾度か死生ノ境を経、遂に兇賊を退治して歸る。場面の回轉すること幾十回、萬尺の活動寫眞を見るよりも更に興深し。絶好の讀物!!!

少年 伽 古戰場物語

再版 定價 六十五錢 郵税六錢
四六判 古戰場寫眞多數入

文學博士 幸田露伴先生序 文學博士 黑板勝美先生序

須藤 寒泉 著 新

古今著名の戦争譚を、其の戰場と結んで物語る所、流暢の筆平易の文、英雄偉人の事蹟歴々徴すべく、名勝舊蹟の地勢掌に指すが如く、歴史を愛好し、勇ましき戦争譚を愛好する少年少女諸君は來れ

少年物語 ナポレオン

四版 千頭清臣先生著 定價五十錢
有本芳水先生編 郵税六錢
四六判美本

戰陣スケッチ

再版 日本少年記者 定價卅五錢
變名 五郎先生著 郵税四錢
四六判美本

冒險小説 地底の寶玉

再版 三津木春影先生著 價五十五錢
郵税六錢
四六判美本

案圖と工手

工藝美術發達の基礎は小學校の手工にあり
歐洲の大動亂は我國工藝美術の覺醒を促す

東京女子高等師範學校校長 藤五郎 著
定價十五錢 郵稅四錢 菊判上製

從來我國に行はれたる手工は自然物及器具類を單に手織りして作るもののみならず、たゞのみに努めたりしが、今後の手工は自ら新奇なる器械を工夫發明せざるべからず。本書は多年女子高等師範學校助教たる著者が多年の經驗より兒童獨習書及教師の參考書として三百六十種を編成したるもの、坊間の手工製圖と同日の論に非ざるなり。

木内菊次郎先生著

圖畫應用 紙細工 三版

定價五拾錢 郵稅八錢 菊判全一冊
美麗なる原色圖を挿入し、説明極めて詳細懇切

最新手工科教授法

定價卅五錢 郵稅六錢 大版全一冊
最新學理に依りて手工教授法の眞髓を説けるもの

今や全國各小學校は手工科を重要視するに至る
本書は兒童唯一の獨習書又教師無二一の參考

小學校兒童のおさひらの方

東京兩高等師範學校校長 六十名共著

定價六十五錢 郵稅六錢

學校で習ふだけで、家庭に於て少しもおさひらひしなれば到底良い成績を得られないものではありせん。又どんなにおさひらひを、たとへ、其の仕方が間違つてれば駄目でありませぬ。處が大抵の兒童は何ういふ風におさひらひをしてよいかといふことを知らず、又親達も何うして子供

廿二版
東京高等師範學校教授 佐々木吉三郎先生序
東京女子高等師範教授 藤井利譽先生序

におさひらひをさせるかといふことも知らないので。それで却つて惡結果を來たすばかりであります。本書はおさひらひの仕方を詳説したもので、殆んどこれまで家庭の手のつかなかつた事まで、微に入り細に亘つてゐます。世の父兄達や小學校兒童達は是非一本をお求め下さい。

四六判 全一冊 美本

模範算術獨習

定價四十五錢 郵稅六錢
中學校女學校程度の入學試験準備獨習用として完全。本書は先づ用利問題を促し、其根本的解釋を與へ、次に練習法より受驗法まで懇篤に教へた。

高間照中宮佐久太郎三氏著
上田多仲

最新珠算全書

定價卅五錢 郵稅六錢
獨習の困難なる珠算を誰にても短日月の間に熟達せしむるやうその秘法を説盡せるもの、記述平易、説明親切、何人も熟達自由自在なり。

四六判全一冊

好評八十版

涙の物語

四六判裝幀優美

定價三十五錢
郵稅四錢

少女『君子』の身の上は、聞くも涙にして、語るも涙であります。涙に始まつて涙に終るこの悲しい一篇の物語は、少女小説の名を冠してはありますけれども、一面から見れば極めて健全なる家庭小説であります。清新の調、悲痛の辭、全卷に溢れて居ります。それで家庭に於ては、お母さんも、姉さんも、妹さんも、何れも讀んで面白く、また子女の情操と徳性とを養ふことが出来ます。愛讀を薦む。

■岩下小葉生

一名著

同情に富める少女達に此二名著を薦めます。恐らく涙に袖をしぼらぬ方がありますまい。

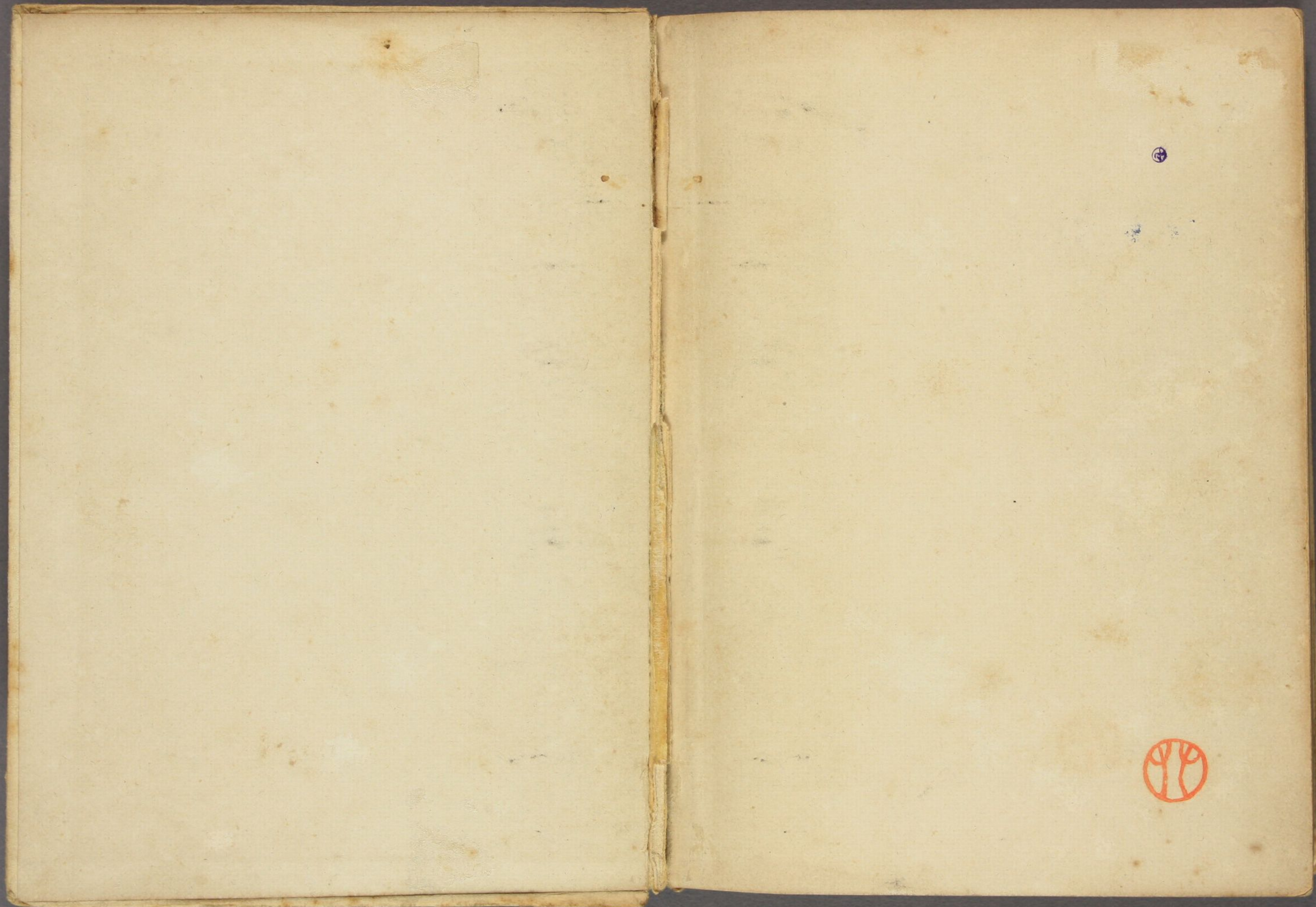
好評評再版

悲しき思ひ出

四六判裝幀優美

定價四十二錢
郵稅六錢

母の僅かの過ちより遂に貧苦のどん底に陥り、やるせなき悲しみを懷いて街路に彷徨する憐れなる少女が、不可思議なる運命の絲にあやつられて、かよわき身に負ひきれぬ重荷を負はされ、未だ幼きに世路の困苦をなめつくし、遂に思はぬ奇縁に逢着す。構想優美にして哀情轉た切なり。



43

